

くらしと協同の本

阿部 真大 著

『地方にこもる若者たち
—都会と田舎の間に出現した新しい社会—』

【BookData】

発行 朝日新聞出版 2013 年 6 月 213 ページ

値段 760 円 + 税

ISBN : 978-4-02-273506-5



評者：福田 善乙（高知短期大学名誉教授 ㈱四銀地域経済研究所客員研究員）

本書は岡山県での集中的な調査・東日本大震災に関する調査と J ポップなど歌の内容変化に着目し、地域と若者の変容を分析し、「現在の地域社会と若者論」を展開し、未来への方向性を示唆しようとしたものである。本書の内容を簡単にみていこう。現在篇「地方にこもる若者たち」（第 1 章～第 3 章）は余暇・人間関係・仕事の三分野で若者の状態を分析している。若者と余暇では、「モータライゼーション」と「大規模ショッピングモール」の登場で「地方都市」こそ若者の「理想的な生活の場」になったと整理する。若者と人間関係ではここでもモータライゼーションで煩わしさが排除され、若者にとって地方都市が魅力的となる。同時に、人間関係の希薄化による「不安感」は別の形で新しい関係の可能性を示唆する。若者と仕事では、仕事の満足度は著しく低いが、若者の多くは「仕事のやりがい」（精神面）、「親との同居」（金銭面）でカバーしているという。歴史篇「J ポップを通して見る若者の変容」（第 4 章）では J ポップの歌の内容変化を通して、若者の「自分らしさ」のつくられ方の変容を追っている。このなかで、「地元」はモータライゼーションの「完遂」で「世界から自分たちを守ってくれる楽しい地元」になる。「地元」は「大人の世界」

から「若者の世界」になる。しかし、それは同時に公共性の喪失をもたらす。未来篇「地元を開く新しい公共性」（第 5 章、第 6 章）では、「ポスト地元の時代」にむけ、アーティストは「他者との出会いのなかで試行錯誤する自分らしさ」の「モード」を示す。同時に喪失した「公共性」を取り戻すために「新しい公共性」を提示する。そして、多様性の時代への対応として、抵抗→同化→分離→総合の 4 つの段階があり、「大人」は「同化」の段階にあるのに対して、「若者」は「分離」から「総合」へ進化しており、「大人」は「若者」に学ぶ必要がある、という。この著書に対して、「書評」というよりも気付いた点を述べていきたい。

第一に、著者自身も若者（20 代～30 代）の一人であるが、若者の状態分析について若者の発展の芽を大切にしたい視点になっていることである。題名になっている「地方にこもる若者たち」は、一般的には内向きになっている若者のマイナスイメージが強いが、この「こもる」の意味を「内にこもりつつ外に開いていく」＝「新しい生き方」と位置づけ、プラスイメージに転化させている。この視点は大切である。

第二に、具体的な調査の結果とその意味を明らかにするために、若者たちが生きている時代

の歌の分析から若者論を展開しているが、その手法について学ぶ点は大い。また、著書のなかに5つのコラムが入っているが、それが事態を説明するのに解りやすい例示となっている。特に、最後の「ジャイアント・キリング」の事例は「ギャル的なマネジメント」を理解する好例となっている。

第三に、同時に疑問に考える点がある。その一つが、「地域」のとらえ方である。「都会」「田舎」「地方」「大都市」「地方都市」「地元」などいろいろな表現をしており、その関係性が解りづらい。「地域」の基礎単位や範域を整理する必要があるのではないか。私自身は「地域」とは「そこに住んでいる人たちが民主的に話し合い、お互いに人間として豊かになっていく場（空間的領域）」と位置づけている。そして、範域は都市地域と農村地域は異なるのであり、都市では一般的に生産（労働・仕事）の場と生活の場が離れているので、「居住地域」と「職域」の両方を統一的に把握することが必要である。

著書では主として「居住地域」における若者を見ており、若者の消費生活の変容の分析が中心となっている。第3章の「若者と仕事」で一定の分析はしているが少ない。地方都市の若者を考える場合も「職域」の分析は大切な視点となる。

第四に、範域を都会と地方と田舎に区別し、そのなかで「地方（都市）」の若者の分析をして、若者論を構築しているが、若者論を普遍化するためには、それぞれの地域の若者を分析する共通の視点が必要である。私流に言えば、自分（足元）から世界をみる視点である。簡単に言えば、私（自分）→市町村→都道府県→日本→世界という視点。すなわち、私がいるから市町村がある、市町村があるから都道府県がある、都道府県があるから日本がある、日本があるから世界がある、と自分から世界へ開いていく視点である。私はこれを「足元（自分）から世界を串刺しにみる視点」と呼んでいる。このような視点

が必要ではないだろうか。

第五に、「若者（たち）と大人（たち）」、「郊外の大規模ショッピングモールと商店街（市街地）」、「都会と田舎」「女性と男性」「ギャル的なマネジメントとヤンキー的なマネジメント」と型に分類して分析している点である。変容していく姿を理解しやすい点もあるが、分析が型にはまって、画一的・固定的になる可能性がある。多様性と流動性のある分析を加味する必要がある。例えば、大規模ショッピングモールは現在スクラップアンドビルドを通じて盛衰しているし、商店街も努力して活性化しているところもあるからである。

第六に、地域や若者が変容していく要因としてモータライゼーションが一つの基軸になっている点である。これは的を得てるが、もう一つテレビ・携帯電話・パソコン・インターネットなど情報通信手段の変化による地域や若者の生き方の変化を考えていく必要があるように思う。

第七に、これからの時代を切り拓くキーワードとして「新しい公共」（旧来の血縁や地縁に依らない新しい人的ネットワーク）の構築を提示しているが、その内容についてはまだ十分に展開していない。今後の課題といえるだろう。

第八に、著書で「…かもしれない」という表現が比較的多く使われている点である。いろいろな側面に配慮して使用していると思うが、逆に論旨があいまいになり、解りづらくなっているように思う。物事を断定できないときは、この表現を使いがちであるが、論旨を明確にするためには、なるべく避けることが必要ではないだろうか。

以上、私が気になった点を中心に述べさせていただいた。全体として若者たちの実像に迫ろうとする姿勢と分析手法には大きな刺激を受けた。「おわりに」で「本格的な統計調査は今後の課題としたい」といわれているので、更なる成果に期待している。